

高知県香美郡土佐山田町

稻荷前遺跡発掘調査報告書

INARINOMAE

— 第41-4号明治地区ほ場整備工事関連遺跡発掘調査 —

1990年1月

土佐山田町教育委員会

序

県下のは場整備事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査については、は場整備事業の拡大とともに、その件数も年々増加してきました。こうした状況のもとで、調査が工事と併行して円滑に実施できるよう銳意努力しているところあります。今回調査した稲荷前遺跡は、平成元年度における分布調査により新たに発見された遺跡であり、弥生時代から中世にかけての長期間にわたる複合遺跡であります。遺物は、堅穴住居内等から弥生時代中期後半の土器がまとまって出土し、今後土佐山田町はもちろん土佐の弥生時代の社会を知る上でも貴重な資料であります。また、石室状遺構は、県下では類例がなく重要な発見となりました。この報告書が、少しでも広く活用され、埋蔵文化財に関する理解を深めていただく一助になれば幸いです。

最後に、この調査に御指導を戴きました高知県教育委員会の各先生方並びに調査に御協力を頂いた地元関係者、関係諸機関の皆様に心から感謝とお礼を申し上げます。

平成2年1月31日

土佐山田町教育委員会

教育長 岡本 章博

例 言

1. 本報告書は明治地区県営は場整備事業に伴い、高知県農林水産部耕地課の委託を受けて土佐山田町教育委員会が実施した船荷前遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は高知県教育委員会の協力により土佐山田町教育委員会が調査主体となり1989年8～10月に行い、整理作業及び報告書作成は1989年11月～1990年1月に実施した。
3. 発掘調査及び整理作業、報告書作成は以下の体制で行った。

調査員	吉原達生（高知県教育委員会文化振興課主事）
"	森田尚宏（" 主幹）
"	出原恵三（" 主事）
総務	吉村泰典（土佐山田町教育委員会社会教育課社会体育係長）
4. 報告書の執筆は次のとおりである。I・II・III・IV-2 森田、IV-1・3～5 吉原、V 森田・吉原。編集は吉原、森田が協議し行った。
5. 図中の方針は磁北であり、調査区は現地の工事計画を基準として任意に設定した。また、標高は海拔高である。
6. 発掘調査及び報告書刊行にあたっては、地元地権者の方々をはじめとし、明治地区土地改良区、高知県南国耕地事務所、土佐山田町産業振興課、施行業者池本土木㈱には全面的な御協力、御援助を受けたことをここに記して感謝する次第である。
7. 出土遺物等の調査資料は、土佐山田町教育委員会において保管している。

本文目次

I 調査に至る経過.....	1
II 遺跡の位置と環境.....	2
1 位 置.....	2
2 歴史的環境.....	4
III 調査経過.....	7
1 試掘調査.....	7
2 本 調 査.....	7
IV 遺構と遺物.....	13
1 試掘.....	13
2 A区.....	14
3 B区.....	17
4 C区.....	19
5 D・E区.....	21
V まとめ.....	24

挿図目次

- | | |
|---------------------|-------------------------------|
| Fig. 1 遺跡位置図 | Fig. 9 A区石室状遺構中央部 |
| Fig. 2 遺跡周辺地形図 | Fig. 10 B区S T 1・S D 1 |
| Fig. 3 周辺遺跡分布図 | Fig. 11 C区S B 1・S A 1・S K 2 |
| Fig. 4 調査区設定図 | Fig. 12 D区S B 2・S B 3・S D 2 |
| Fig. 5 試掘グリッド位置図 | Fig. 13 G 2・16・石室状遺構・表採遺物実測図 |
| Fig. 6 G 2平面・セクション図 | Fig. 14 A区包含層・S T 1出土遺物実測図 |
| Fig. 7 遺構全体図 | Fig. 15 A～E区包含層・C区P 69出土遺物実測図 |
| Fig. 8 A区石室状遺構 | Fig. 16 E区包含層出土遺物実測図 |

表目次

Tab. 1 周辺遺跡表

写真図版目次

- | | |
|---|------------------|
| PL. 1 遺跡航空写真 | 遺跡遠景（東より） |
| PL. 2 遺跡近景（南より） | 遺跡近景（南より） |
| PL. 3 A区石室状遺構全景（南より） | A区石室状遺構（南より） |
| PL. 4 A区遺物出土状態 | A区遺物出土状態（石錐） |
| PL. 5 B区S T 1検出状態 | B区S T 1完掘状態 |
| PL. 6 B区S T 1中央ピット遺物出土状態 | B区S T 1中央ピット出土遺物 |
| PL. 7 B区S T 1遺物出土状態 | |
| PL. 8 C区遺構完掘状態（南より） | D区遺構完掘状態（南西より） |
| PL. 9 E区遺物出土状態 | E区遺物出土状態 |
| PL. 10 | " |
| PL. 11 S K 1、G 12・16、石室状遺構出土及び表採遺物 | |
| PL. 12 S T 1、A・B・E区包含層出土遺物 | |
| PL. 13 S T 1、石室状遺構、A区包含層出土遺物 P 69、A・B・D区包含層出土遺物 | |
| PL. 14 S T 1出土遺物 | E区包含層出土遺物 |
| PL. 15 E区包含層出土遺物 | E区包含層出土遺物 |
| PL. 16 石室状遺構、E区包含層出土及び表採遺物（表面） | |

I 調査に至る経過

稻荷前遺跡の発掘調査は、明治地区県営は場整備事業に伴い実施された。高知県内におけるは場整備の進捗率は低く、県中央部の高知平野においても南国市を中心とする地域を除き、周辺部では地形に沿った狹隘なは場が多く残されており、は場整備事業の推進が求められている。その結果、近年では各地で大規模なは場整備事業が県営事業として実施され、明治地区県営は場整備事業もその一環として行われており、今後も全県的に事業の増加が予定されている。

調査の対象となった稻荷前遺跡は、昭和61年度から国庫補助事業として行われている県内遺跡詳細分布調査によって平成元年度に発見された新たな遺跡である。分布調査は、昭和63年度・平成元年度の2ヶ年をもって香美・長岡郡下の10ヶ町村及び南国市を対象として行われており、土佐山田町内においては従前の周知の遺跡に加え、新たに100ヶ所以上の遺跡が新発見され、南国市、野市町とともに高知県中央部における遺跡分布の中心を占めている。

分布調査の結果、多数の新発見遺跡の所在が明らかとなったため、年度当初に土佐山田町内における土木工事等の開発計画の照会を行ったところ、明治地区県営は場整備事業明治工区が稻荷前遺跡に該当することが判明した。当該は場整備事業は本年度事業であるため早急に対応を迫られることとなり、高知県南国耕地事務所、土佐山田町産業振興課、明治地区土地改良区、高知県教育委員会、土佐山田町教育委員会により遺跡の保存と対応について協議がなされた。稻荷前遺跡は物部川の西岸、河岸段丘上に位置しており、は場整備計画地全面（約5ha）に遺物の散布がみられるところから広範囲にわたる遺跡と考えられたが、遺物包含層、遺構等の具体的な広がりについては不明であることから、工事計画図をもとに試掘調査を早急に行うこととなった。

1次試掘調査は8月4～10日にかけて、水路、道路、切土部分を中心に $2 \times 2\text{ m}$ のグリッド11ヶ所により行われた。その結果、東半部のグリッドでは遺構は検出されず、遺物もローリングを受けたものが少量出土したのみであり、遺物包含層はみられなかったが、西半部ではG2において弥生時代中～後期の土坑、遺物等が検出された。以上の試掘調査をもとに、2号道路、3・4号排水路、切土範囲の一部を調査対象地として再度協議を行った。平成元年度事業であるところから計画変更等は不可能であり、工事による影響を受ける部分については発掘調査により記録保存を図ることとなったが、西半部は水田が多く、1次調査では着手できるところが少なかったため2次試掘調査を8月29日、9月21日に行った。結果的には2号道路部分では遺構は検出されず、3号排水路部分において柱穴、溝等を検出したので、再び協議を行い、最終的には3号排水路部分及び切土部分について緊急調査を行うことになった。

調査にあたっては、南国耕地事務所、明治地区土地改良区、地元地権者の方々の理解を得ることにより協議を進めることができ、記して謝意を述べるとともに、今後も埋蔵文化財の保護について御協力を願うところである。

II 遺跡の位置と環境

1 位置

稻荷前遺跡は高知県香美郡土佐山田町中野に位置しており、町内小字図でみれば稻荷前、コヲキ、車田にあたるところから、遺跡の中心を占める小字である稻荷前を取り遺跡の名称とした。なお、当遺跡は平成元年度における分布調査により新たに発見された遺跡である。

遺跡の位置する土佐山田町は、高知県最大の平野部である高知平野の北端にあたり、県都高知市から東へ17km、北に大豊町、南に野市町、東に香北町、西に南国市と接している。地形的には、町内北部に四国山地の1,000m級の国見山、明神岳、茂ノ森等の山々が聳えており、その南には吉野川水系の穴内川との分水嶺である甫喜ヶ峰、赤塚山、根曳峰等の低山地が位置している。河川は新改川等の中小河川が低山地から流出しており、また、県内3大河川のひとつである物部川が三嶺を発し、東流した後に町内へ流入し、太平洋へ注いでいる。

物部川に沿う山間部には、香北町より続く河岸段丘が非常によく発達しており、神母の木付近から下流域にかけては、南国市日章付近まで延びる発達した扇状地が形成され、広大な平野部をみることができる。町の中心街の北から西方にかけては、新改川（下流では国分川）による扇状地が形成されており、高知市へと続いている。中央部は古期扇状地の長岡台地であり、標高約50mと香長平野の最高レベルを測り、次第に高度を下げながら南国市小篠付近において新期扇状地になだらかに移行している。遺跡は、この長岡台地を中心としてその周辺部に数多く位置しており、稻荷前遺跡も標高40m前後を測る中位の新期扇状地上に立地する遺跡である。



Fig. 1 遺跡位置図

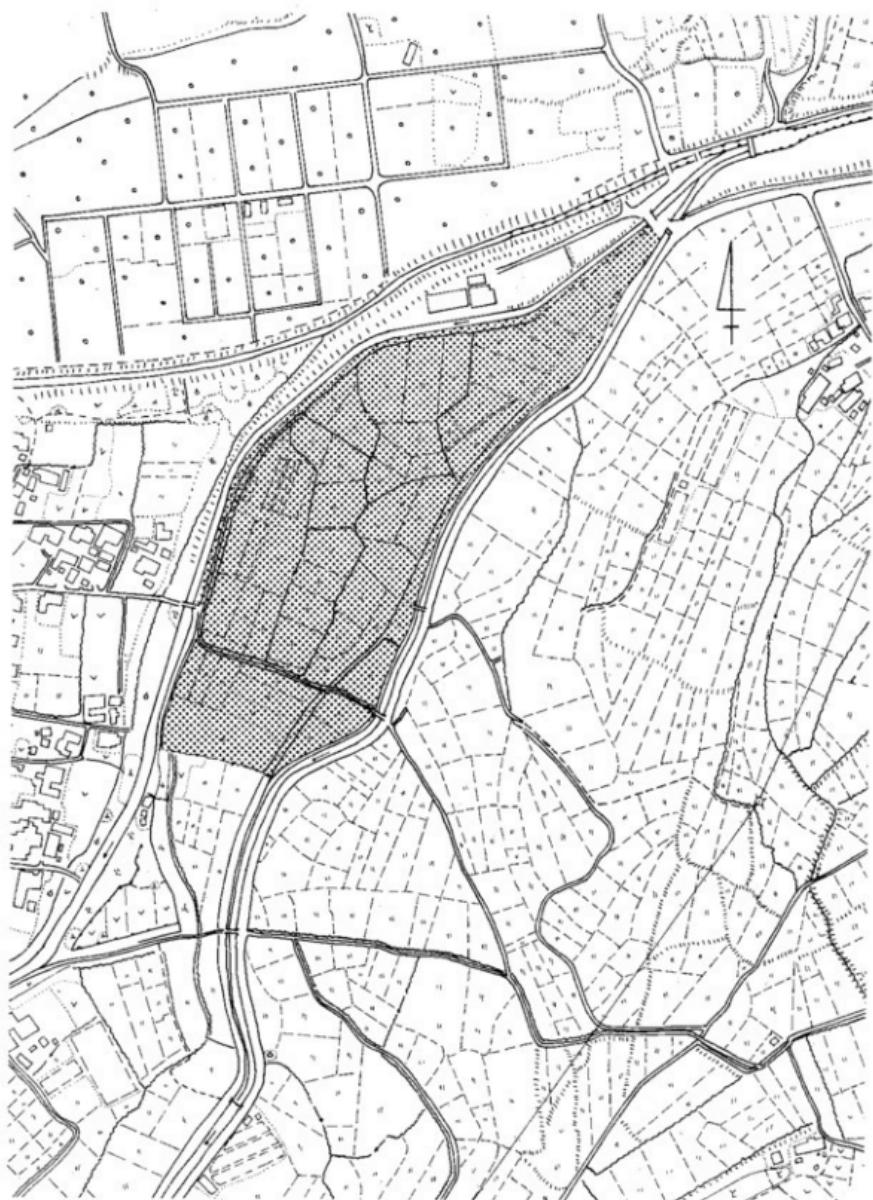


Fig. 2 遺跡周辺地形図 ($S = 1/4,000$)

2 歴史的環境

土佐山田町の歴史的環境としては縄文時代からの遺跡が知られているが、旧石器時代の遺跡は発見されていない。縄文時代の遺跡としては、山間部、吉野川の支流、穴内川流域に飼古屋岩陰遺跡が立地しており、発掘調査の結果、縄文時代早期の押型文土器、石錐等が出土している。南部の平野部においては現在のところ縄文時代の遺跡は発見されていないが、物部川流域に立地する可能性は高いと考えられる。

弥生時代以降になると遺跡数は急増し、特に弥生時代後期から古墳時代にかけての遺跡が数多く知られている。弥生時代前期の遺跡は未発見であるが、中期の遺跡としては龍河洞開穴遺跡が広く知られている。当遺跡は三宝山(322m)の中腹に開口する石灰岩の洞穴遺跡であり、昭和8年に発見されている。昭和33年には高知県教育委員会による洞穴総合調査の一環として発掘調査が行われ、弥生時代中期後半と後期の土器、石器、骨角器、獸骨、貝類等の遺物が出土しており、中期後半の一括資料として龍河洞式の型式設定がなされている。また、周辺の低山地には、石庖丁、石斧等を出土した子岳、雪ヶ峯遺跡が存在しており、山間部における谷水田の開発による分村集落の存在を考えることができる。平野部における中期の遺跡はいまだ数少ないが、稻荷前遺跡の西方約1kmには、同じ中位の新規扇状地上に原遺跡が立地している。

発掘調査の結果によれば、中期後半の住居跡1棟と溝が検出されており、町内における中期の

番号	遺跡名	時代	備考	番号	遺跡名	時代	備考
1	ロミノヲ谷古墳	古	発掘調査	33	岩村土居城跡	中世	
2	久礼田古墳	〃		34	表中内遺跡	弥生	
3	中山田古墳	〃		35	平杭遺跡	〃	
4	高松古墳	〃	消滅	36	大北遺跡	〃	
5	植木田古墳	〃		37	徳弘土居城跡	中世	
6	久次西久保古墳	〃		38	立田土居城跡	〃	
7	田村氏西北古墳	〃		39	上福工窯遺跡	弥生	
8	次郎ヶ谷西古墳	〃		40	大瀬闘町田遺跡	〃	調査出土地
9	新改古谷西古墳群	古墳一平安		41	片山土居城跡	中世	
10	大法寺古窯跡群	〃		42	トリアサリ遺跡	弥生	
11	須江遺跡	古墳～中世		43	西見当遺跡	〃	発掘調査
12	タンガン窯跡	古		44	田村土居城跡	中世	〃
13	植木城跡	中世		45	田村遺跡群	調査～近世	〃
14	前行古墳群	古		46	深瀬遺跡	〃	〃
15	人元社古窯跡群	〃		47	父義寺古墳	古墳	
16	雪ヶ峰城跡	中世		48	龜山古窯跡	平安	
17	山田城跡	戦国		49	小山谷古墳	古墳	
18	ひづのき遺跡	発生～中世	発掘調査	50	白岩アゴデン古窯跡	平安	
19	大塚古墳	古		51	竹ノ内古墳	古	
20	楠目遺跡	発生～平安	〃	52	大谷城跡	中世	
21	林田遺跡	弥生～中世	〃	53	大谷古墳	古	発掘調査
22	龍河洞開穴遺跡	弥生	〃	54	猪ヶ峰遺跡	弥生	
23	鳥ヶ森遺跡	戰国		55	大峰山古墳	古墳	
24	高柳土居城跡	中世		56	北地遺跡	弥生～平安	
25	原遺跡	発生～古墳	発掘調査	57	大井遺跡	平安	
26	大里ウ遺跡	奈良～平安		58	野口遺跡	弥生～古墳	
27	三畠遺跡	発生～古墳	発掘調査	59	住吉遺跡	弥生	
28	比江原寺跡	白鳳～奈良	〃(国史跡)	60	須留田遺跡	中世	
29	土佐國分寺跡	奈良～中世	〃(国史跡)	61	香宗城跡	〃	
30	東崎遺跡	奈良～古墳	〃	62	曾我遺跡	弥生～中世	発掘調査
31	東崎遺跡	奈良～古墳		63	下分遺跡	弥生	〃
32	大孫遺跡	弥生		64	十万遺跡	調査～近世	〃

Tab. 1 周辺遺跡表



Fig. 3 周辺遺跡分布図

集落を知る上で重要な遺跡である。弥生時代後期になると遺跡数は急増し、その規模も大きくなっていく。特に後期後半から古墳時代初頭にかけては土佐山田町だけではなく、香長平野の各地に集落が存在していたとみられ、代表的な遺跡としては、ひびのき遺跡をあげることができる。同遺跡は昭和49～50年に発掘調査が実施されており、7基の住居址をはじめとし土地、溝等の遺構が検出されており、出土土器によりヒビノキI～III式の型式設定がなされている。最近の調査によれば、北は鏡野中学校から南は国道に至る広範囲な遺跡であることが判明しており、長岡台地上に立地する遺跡の中では中心的な集落であったと考えられる。また、物部川の東岸部においても、発掘調査がなされた遺跡として林田遺跡が存在しており、やはり弥生時代後期後半から古墳時代初頭を中心とする集落であることが判明している。

町内の古墳は山麓部に多数立地しており、南国市とともに県内における古墳の集中地帯となっている。いずれも横穴式石室を有する後期古墳であるが、大塚古墳のみは前方後円形を呈する墳丘であるとみられている。古墳の多くは開墾等によりすでに破壊されているが、その存在数からみればこれに対応する集落の存在が考えられるが、現在のところ6～7世紀の集落は確認されておらず、その発見は今後の課題である。

土佐山田町を特徴づける遺跡としては、窯跡をあげることができる。新改川が山間部から平野部へ流れ出る地域には須江の地名がみられ、その山麓斜面から上流の谷間斜面には多数の須恵器の窯跡が発見されている。これらの窯跡は古墳時代から平安時代に至る各時期に操業されており、土佐における窯業の中心地であったと考えられる。須恵器以外には瓦なども焼かれており、その製品は国分川の下流（南国市）に位置する白鳳～奈良時代の寺院跡である比江庵寺や土佐国分寺跡などに供給されている。

古代における土佐山田町については、調査された遺跡も少なく不明な点が多いが、町内の各地には当該時期の須恵器等が採集される遺跡が多く存在している。南部には郡衙に比定されている大領遺跡、北部の須江には約8町の一部に土壘を残す区画が存在しており、古代官道の駅家ではないかと推定される遺跡が存在するなど、重要な遺跡が立地している。

中世においては、現町街の北に位置する楠目城跡（山田城跡）を居城とする山田氏が勢力を張っていたが、戦国時代には岡豊城跡に居を構えていた長宗我部氏の攻撃を受け滅亡している。平野部には高柳土居、岩村土居、佐岡土居などの土壘等を残す居館跡をみると、周辺の山間部には鳥ヶ森城跡、雪ヶ峯城跡、植村城跡などの中世城跡が存在している。

III 調査経過

1 試掘調査

試掘調査はⅠで述べたとおり、第1次と第2次の2回にわたり行われた。第1次試掘調査は、 $2 \times 3\text{m}$ のグリッド10個、 $2 \times 2\text{m}$ のグリッド1個の計11個(G 1~11)であり、水路、道路、切土部分を中心とした休耕田に設定した。全体的にみれば東半部に9個、西半部に2個であり、東半部では比較的有効な基礎資料を得ることができたが、西半部ではやはり資料不足であった。しかし、遺構・遺物の検出状態からみればG 2において平安時代の土師器、弥生時代後期前半の甕・鉢、中期後半の土坑を検出しておらず、3号排水路を中心とする部分において遺物包含層及び遺構群が存在するものと考えられた。他の試掘グリッドでは、出土遺物は混在しておりローリングを受けていることから流れ込みとみられ、また耕作土の浅い位置で地山の砂礫層が出ていることから、東半部はすでに削平を受けていると思われる。

第2次試掘調査では、2号道路、3号排水路部分を対象として、さらに状況を確認するため $2 \times 3\text{m}$ のグリッド5個、 $2 \times 2\text{m}$ のグリッド3個の計8個(G 12~19)を設定した。2号道路部分のG 12・13では耕作土下に砂礫層が検出され、遺構は発見されなかった。G 14では耕作土下に灰褐色砂質土、黒色粘土といった土層の堆積がみられたが遺構は発見されず、遺物も須恵器、土師器の細片のみであり2次堆積と考えられた。しかし、3号排水路部分ではG 15・16・19の各グリッドで遺構が検出された。検出面はいずれも耕作土直下であり遺物包含層はほとんどみられない。検出遺構はG 15では、褐色砂質土面において弥生時代中期とみられるピット4個、G 16では、暗褐色砂質土面において奈良時代の溝、G 19では、黄色シルト上面において平安時代ではないかと思われる柱穴2個である。以上の第1次、第2次の試掘調査の結果により、3号排水路及びその南西部の切土部分を対象として本調査を実施することとなった。なお、試掘調査面積は106 m^2 であり、調査期間は8月4~10・29日、9月21日である。

2 本調査

本調査は3号排水路部分から行い、遺構の広がりを確認しつつ拡張し、調査を進めた。その結果、南よりA~E区の調査区が設定されることとなった。遺構の検出状態は試掘と同じく耕作土直下であったが、E区のみにおいて弥生時代中期後半の遺物包含層が認められた。検出された遺構は、A区では石室状遺構1基であり両側には帶状の集石を伴っている。B区では弥生時代中期後半の住居跡1棟(ST1)、ピット7個、溝1条(SD1)、C区では掘立柱建物跡1棟(SB1)、棚列1列(SA1)、土坑(SK2)ピット約100個、D区では掘立柱建物跡2棟(SB2・3)、溝1条(SD2)、E区ではピット5個である。遺構の時期は弥生時代中期から中世の各時代にわたっており、当遺跡は複合遺跡である。なお、調査面積は、A区75 m^2 、B区227 m^2 、C区336 m^2 、D区150 m^2 、E区114 m^2 、計902 m^2 であり、調査期間は10月5~27日であった。



Fig. 4 調査区設定図 ($S=1/1,000$)

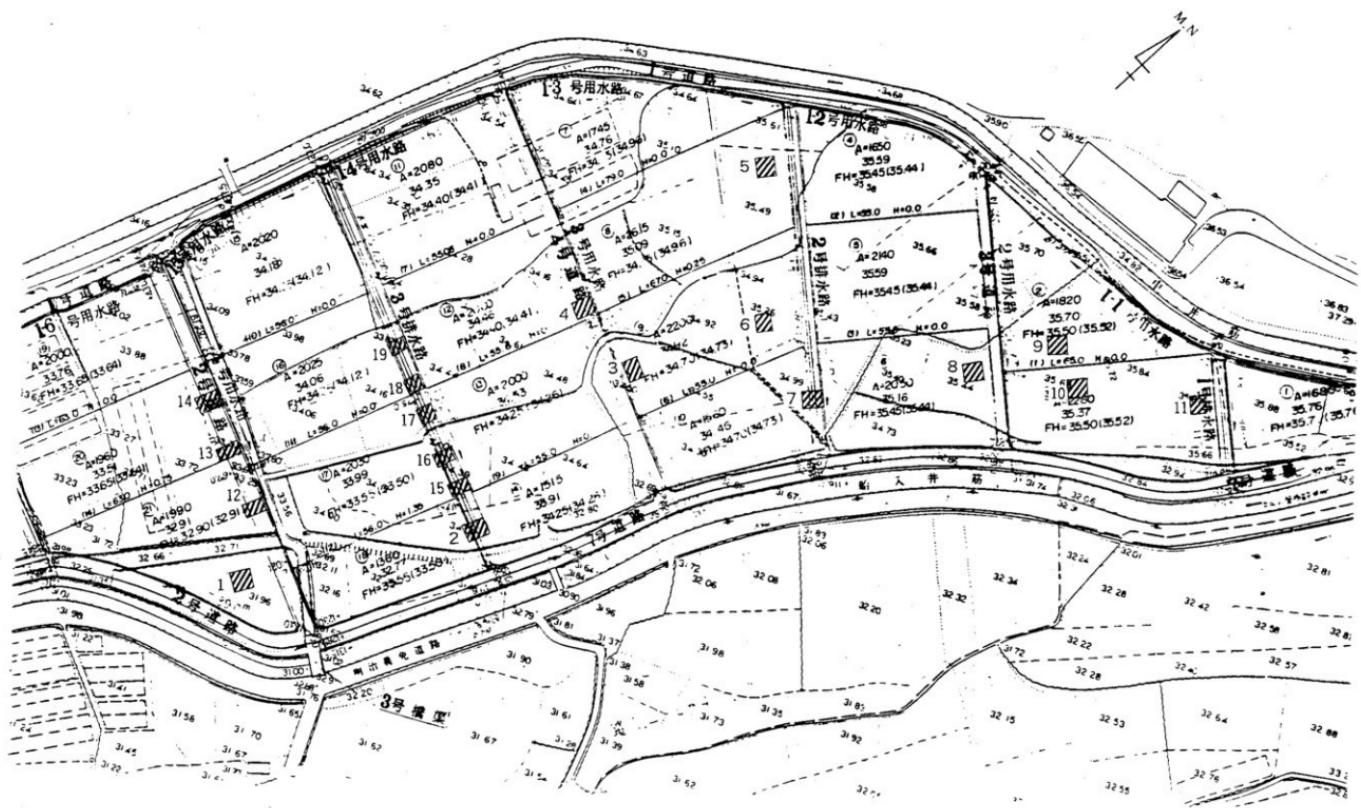


Fig. 5 試験グリッド位置図 (S=1/1,250)

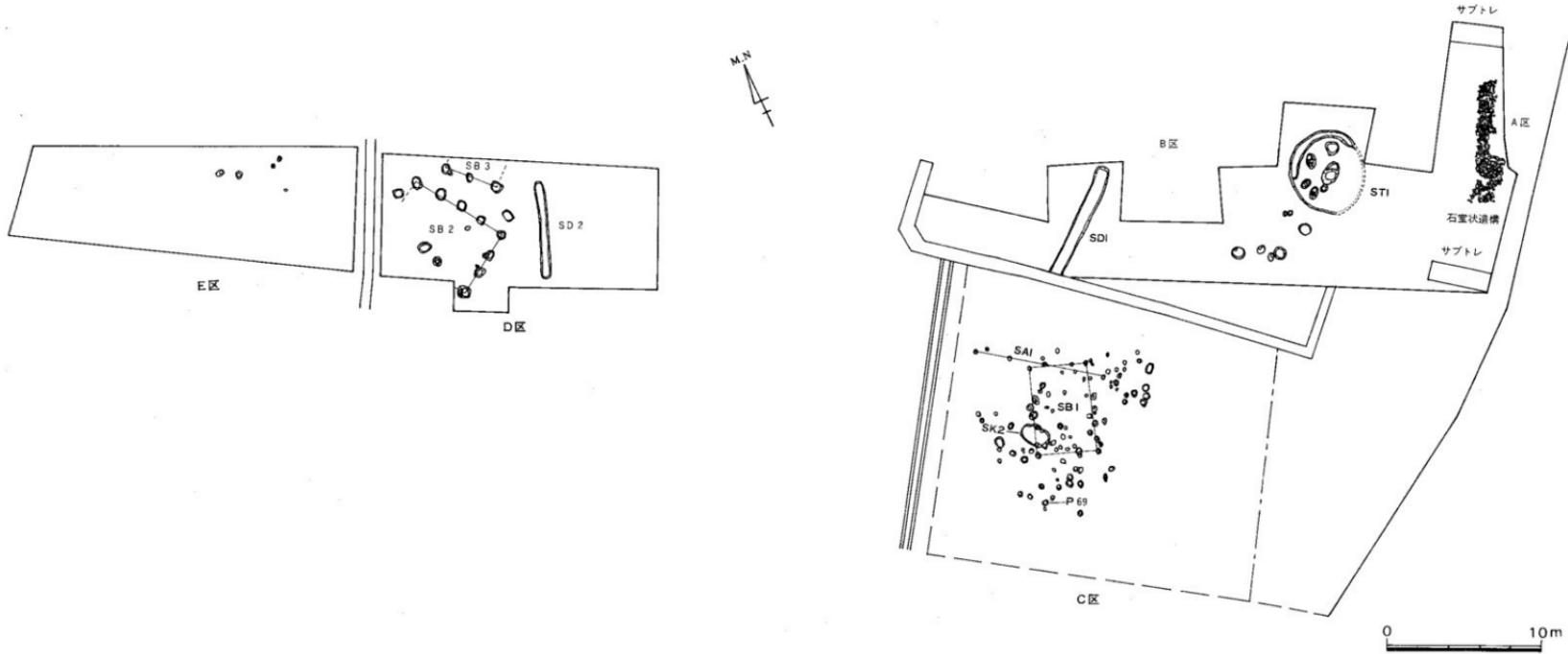


Fig. 7 造構全体図(1/250)

IV 遺構と遺物

1 試掘

試掘グリット(以下G)1~19のうち、良好な遺物包含層及び遺構の存在が確認されたのはG 2・15・16・19である。G 2の基本層序は、I層：耕作土、II層：灰茶色砂礫土、III層：黒色粘土、IV層：暗黄色シルト、V層：暗灰色砂質土である。遺構は、V層上面から土塙1基が検出された。遺物は、III層に弥生土器が多く含まれており、同層が遺物包含層といえる。また、IV層より弥生時代後期前葉の甕・鉢が復元完形の状態で出土した。G 4~11・17・18においても弥生時代から中世にわたる遺物が出土しているが、砂礫層中に各時期の遺物が混存する状態で入っており、かつローリングを受けているものが多い。これらの事実から、G 4~11・17・18から出土した遺物は原位置を保っているものではなく、流れ込みなどによる2次堆積と考えられる。なお、G 15・16・19で検出した遺構については、各調査区において述べる。

土塙

S K 1 (Fig 6)

G 2西側に位置する。平面は楕円形を呈し、長径78cm、短径60cm、深さ28cm、長軸方向N~5°~Wを測る。断面は逆台形をなし、埋土は黒色粘土の単純一層である。遺物は、床面から弥生土器1点が出土した。

出土遺物 (Fig 13-1)

1は弥生土器甕である。胴上部に最大径があり、口縁部は頸部から鋭く屈曲する。口唇部は上方に肥厚し、2条の凹線が入る。器壁は薄く、上にゆくにしたがって厚みを増す。口縁部内

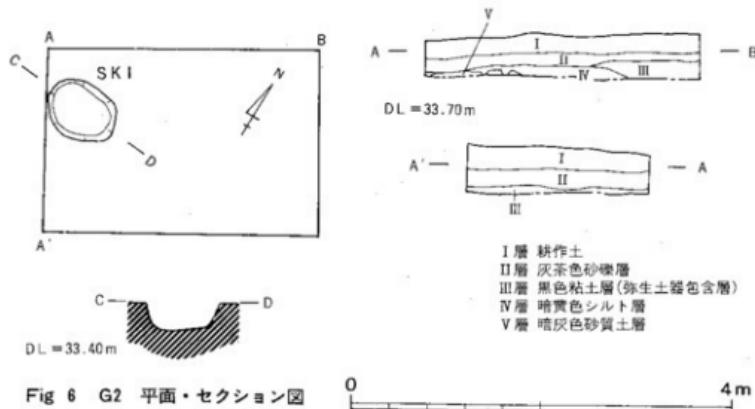


Fig. 6 G2 平面・セクション図

外面、頸部外面直下には、ヨコ方向の強いナデ調整がみられる。胴部外面はタテ方向のハケ及びヘラ削り、内面は丁寧なナデ調整を施す。

包含層出土及び表採遺物 (Fig13-G 2: 2~4, G 16: 5~16, 表抜: 6~7, 17)

2~4は弥生土器裏である。2は最大径を胴部中位に有し、口縁部は「く」の字状に外反し、口唇部は外傾し面をなす。上胴部外面にヨコ方向のハケ調整を施す。3は平坦な底部から緩やかに立ち上がる。外面下部はハケ目をナデ消す。4は弥生土器鉢で、口縁端部は、外方に強くつまみ出し、ヨコ方向にナデる。口唇部は外傾する面をなすが、部分的に凹む。外面は、口縁下20cmのところにハケ目原体(幅6mm)を1条横位に巡らす。内面はナデ調整を施す。5~7は須恵器である。5は杯蓋で、溝(SD 1)から出土している。頂部に宝珠形のつまみをもち、外面にはロクロによるヘラ削りがみられる。6は杯身で、断面逆台形の輪高台を有し、外方へ強く踏んばる。高台脇はナデ調整を施す。7は壺で、扁平で低い高台が付く底部から直立気味に立ち上がる。15~16は鉄釘であり、16は溝(SD 1)から出土している。17は丸瓦で、凹面は細い布目が施され、凸面は摩滅が著しく観察不能である。

2 A区

調査区の概要

A区において検出された遺構は、石室状遺構1基である。同区の基本層序は、I層：耕作土、II層：黒褐色粘質土、III層：黒色粘質土、IV層：黄褐色砂礫土（地山）で、同遺構はII層を掘り下げた後、III層面から検出された。遺物は、主に須恵器・土師器等がIII層より出土した。同層は、ほぼ西から東への落ち込みが顕著にみられ、出土遺物の大半は混入したものであろう。

石室状遺構 (Fig 8~9)

中央部は石室状を呈し、その両側面に帯状の集石を伴う。中央部は長径1.90m・短径1.52m、深さ50~72cm・主軸方向N~42.6°Wを測る。床面は、人頭大前後の砂岩の円礫ないし亜角礫を使用し、平坦面を上にそろえる。側面は、50~80cm前後の大型の楕円礫を使用している。奥壁は2個の立石とし、側壁は1~2段の石積みである。南東部は石がなく開口しているが、舟入川の掘削時に崩壊した可能性がある。両側の帯状の集石は、北東部で5m、南西部で1.50m、幅1.40~1.70mである。

出土遺物 (Fig13-8~14・18~20)

8・9は弥生土器の底部である。8は壺で、厚みのある底部から若干丸味をもって立ち上がる。器面は摩耗が著しい。9は甌で、やや厚みのある底部から直線的に立ち上がる。外面は叩き調整をナデ消す。10は土師器桿である。ベタ高台を有し、底部外面は回転糸切りを行う。内面にはロクロによるナデがみられる。11は土師器杯である。輪高台を有する底部から内湾気味に緩やかに立ち上がり、口唇部は丸くおさまる。内外面共にヘラ磨きがみられる。12・13は須恵器杯で、どちらも輪高台を有し、高台脇にはヨコナデ調整を施す。輪高台は、12が断面逆台形

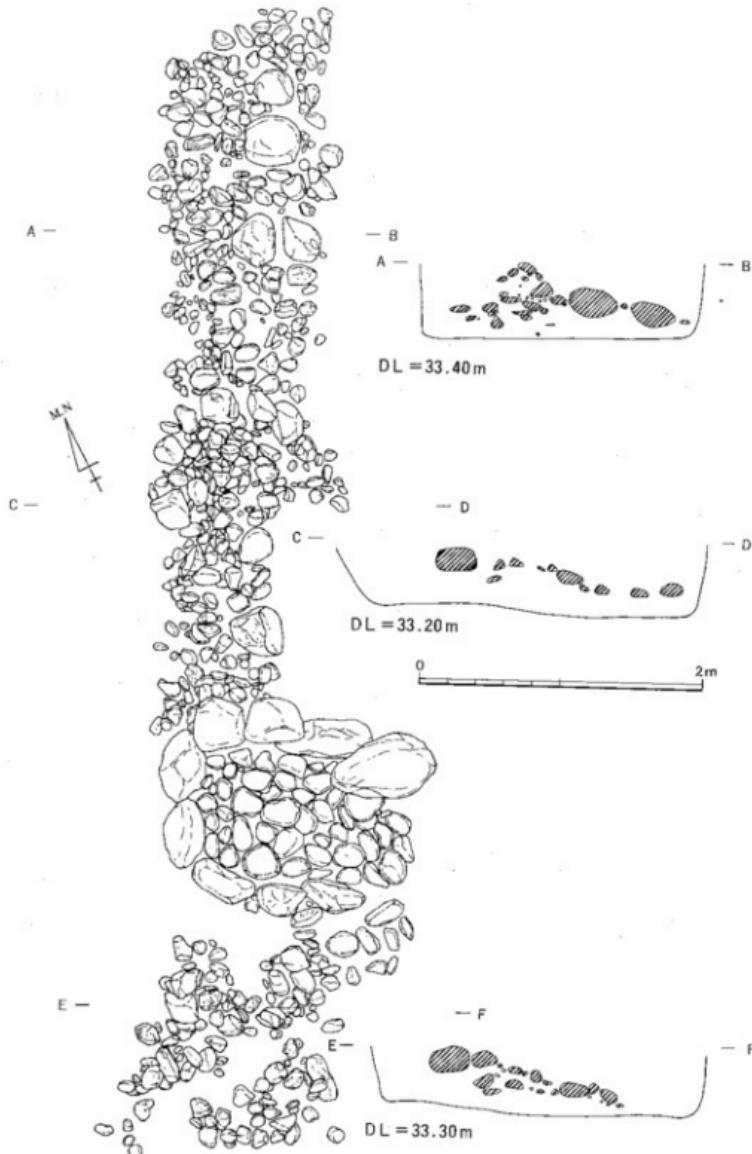


Fig. 8 A区 石室状遗構

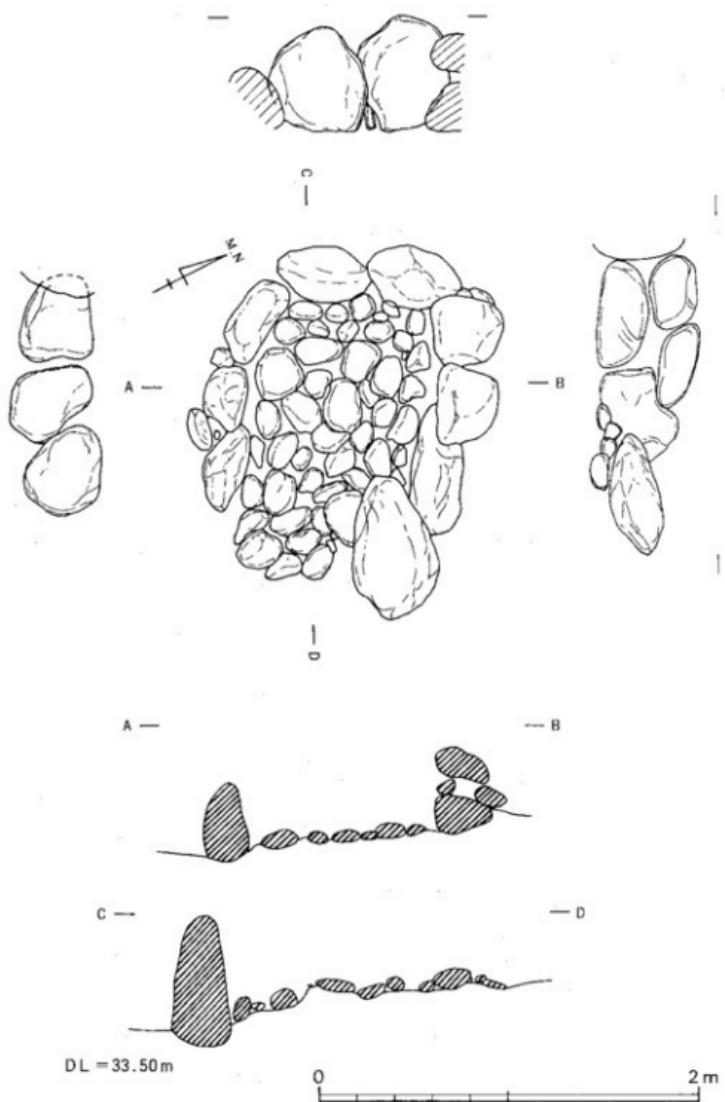


Fig. 9 A区 石室状造構中央部

に対し、13は「ハ」の字状に開く。13の底部外面は回転ヘラ削りを行う。19は須恵器広口壺の口縁部であり、直線的に外反する。口唇部は面をなし、僅かに内側に肥厚する。20は大きく外反し開く須恵器甕の口縁部であり、端部は肥厚し丸く終る。外面には波状文がみられる。18は平瓦で、凹面は摩減が顕著であるが、凸面には繩目の叩き目を施す。14は未成品である。黒色頁岩で、全長12.0cm・全幅3.3cm・全厚1.3cm・重量45.1gを測る。

包含層出土遺物 (Fig.14-21~25, 39-60)

21~24は弥生土器である。21・22は壺で、21は頸部外面に2条の沈線及び竹管文を配した円形浮文がみられる。22は厚みのある底部から直線的に立ち上がる。内外面共に丁寧なナデ調整を行う。23・24は甕で、23は平底から内湾気味に立ち上がる。外面にはハケ調整を施す。24は「く」の字状に強く外反する口縁部を有し、口縁部外面に2条の凹線を施す。また同部には、上から下へ2箇所穿孔がみられる。25は須恵器杯蓋である。口縁部は下方へつまみ出し、強いヨコナテ調整を施す。端部は屈曲して面をなす。39は泥岩の砥石で、6面使用している。全長10.6cm・全幅5.8cm・全厚3.9cm・重量305gを測る。60は砂岩の石錐で、全長5.9cm・全幅2.9cm・全厚1.9cm・重量43gを測る。十字形の切り溝がみられる。

3 B区

調査区の概要

B区において検出された遺構は、竪穴住居跡1棟、溝1条、ピット7個である。同区の基本層序は、I層：耕作土、II層：暗褐色砂質土、III層：黄褐色砂疊土（地山）であるが、住居跡上の位置に現況の畦畔があり、その南においては耕作土直下に地山がみられ、II層は存在しない。遺構検出面はII・III層上面である。

竪穴住居跡

S T 1 (Fig.10)

B区の南部において検出されている。南半部は耕作土直下に地山が出ており、削平のため消滅している。平面形は円形を呈し、推定直径5.2m、深さは残存する北壁で約30cmを測る。埋土は黒褐色粘質土の単一層であり、多量の小礫が混在している。床面は地山の砂疊層であり、周溝及び中央ピットを含むピット6個が検出された。周溝は幅25~35cm、深さ10cm前後を測り、北半部のみにまわっている。中央ピットは長径1.55m、短径0.95mを測る楕円形であり、東部に段部をもつ。深さは30cmを測る。他のピットは径40~80cmを測る橢円形及び不整形を呈し、深さは20~30cmを測る。

遺物は、床面上から壺、甕、高杯、台付鉢、石鐵等が出土しており、他にピット（P 1~4）からも壺、甕などが出土している。特に中央ピット（P 1）では、底部中央から頸部でカットされた壺口縁部が口縁を下に出土しており、埋納されたものではないかと考えられる。

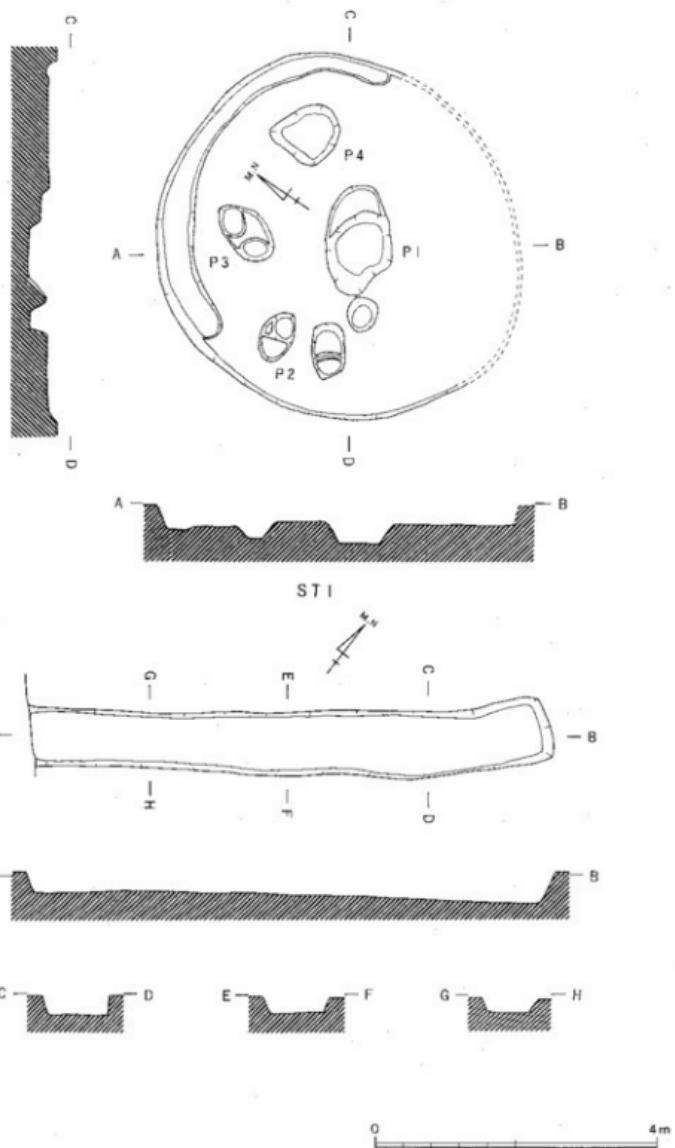


Fig 10 B区 ST1・SD1

出土遺物 (Fig14-26~38・40~42)

26は蓋とみられ粗雑なつまみをもつ。27は台付鉢とみられ、台は2cmの高さをもつ。28~31・37は壺である。28はP1出土の壺口縁部であり、直立する頸部から開き、口縁は再び直立する。口縁端部は面をなし、頸部外面に四線文、内面にヘラ削りを施す。29は緩やかに外反する貼付口縁であり、罐部は丸味をおびる。30・31は上胴部であり、30は竹管押圧の円形浮文、31はヘラによる1字状の列点文を施す。37は底部であり直線状に立ち上がる。32~34・38は甕である。32は張りをもつ胴部から強く屈曲し、口縁部は罐部をやや拡幅し四線文を施す。胴部外面はハケ、下胴部内面はヘラ削りによる調整を行う。33・34は外反する口縁部であり、33の端部は面をなし、34は丸味をおびる。35は高杯杯部であり、口縁部は直立し、四線文を施す。38は底部であり内面にヘラ削りを行う。40はサヌカイト製の石鎌であり、全長2.6cm・全幅2.1cm・全厚0.3cm・重量1.3gを測る。41・42は黒色頁岩の剥片であり、両者ともに原石面を残し、一部に磨痕がみられるところから石庖丁の未製品と考えられる。

溝

S D 1 (Fig10)

S D 1はS T 1の12m北で検出されており、方向はN-53°-Eを測る直線の溝である。規模は検出長7.4m、幅85cm、深さ25~30cmを測る。断面形は箱形を呈し、底面は平坦である。埋土は黒褐色粘質土の單一層であり、試掘グリッドG16で確認した溝である。出土遺物は試掘で述べた須恵器蓋、釘以外に土師器、須恵器の細片が少量であるが出土している。

包含層出土遺物 (Fig15-43~47・49)

43~46・49はII層出土であり、43は弥生土器壺底部である。44・45は土師器鍋口縁部であり、口縁下に鋸をもつ。46・49は須恵器であり、46は甕胴部で内面に同心円文を残す。49は壺口縁であり、強く屈曲し外反気味に開く。47はB区表採の須恵器蓋であり、擬宝珠形のつまみをもつ。

4 C区

調査区の概要

C区において検出された遺構は、掘立柱建物跡1棟、棚列1列、土塙1基及び柱穴群とみられるピット群である。同区の基本層序は、I層：耕作土、II層：褐色粘質土、III層：黒色粘質土、IV層：黄色粘質土で、遺構はIV層上面において検出された。またIV層は、南東部において北から南へと緩やかに傾斜していた。出土遺物は、事前の表採での遺物が多かったのに比べその量は少なく、殆ど細片で復元可能なものはなかった。

掘立柱建物跡

S B 1 (Fig11)

C区中央部に位置する。建物は、桁行3間(5.80m)×梁間1間(3.80m)の南北棟で、棟方向はN-19°-Eである。柱穴の平面は、円形及び楕円形を呈し、径30~60cm、深さ10~60.7cmを測る。柱間距離は、桁行で1.80~2.30mとなっている。埋土は褐色粘質土である。出土遺

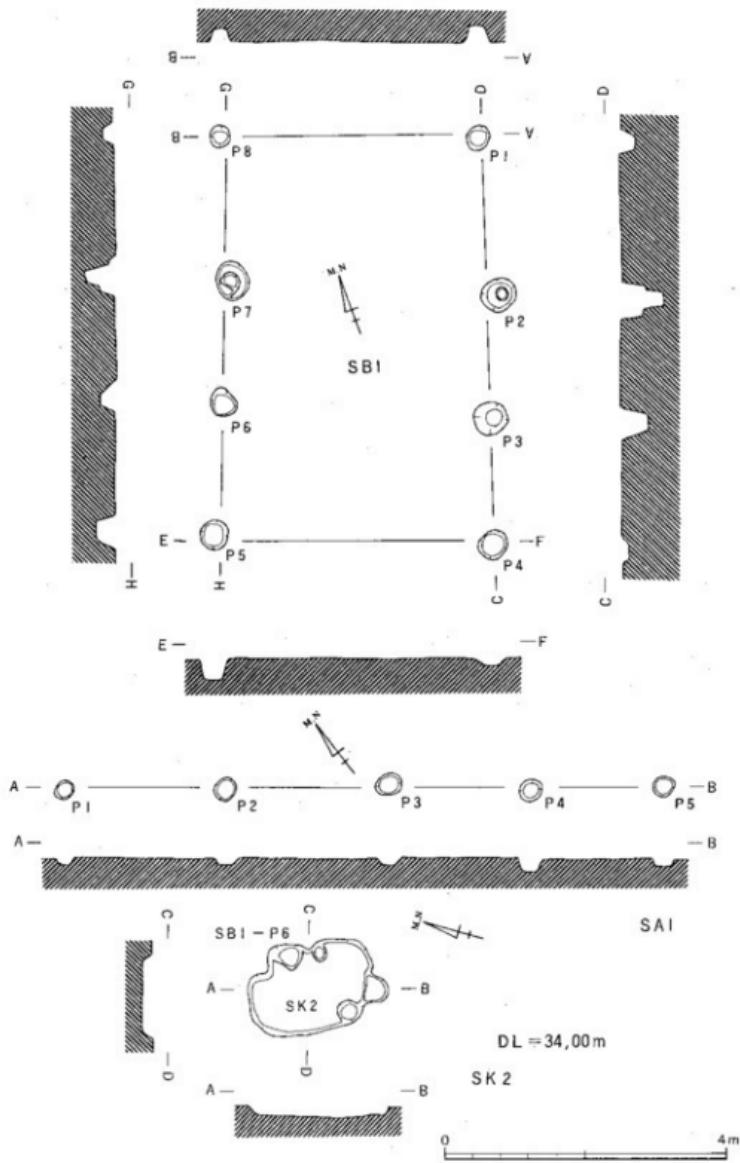


Fig 11 C区 SB1・SA1・SK2

物は、少量で図示できるものはなかった。

柵列

S A 1 (Fig11)

C区北部に位置する。規模は、N-52°-Wの方向に4間分8.54m延びている。柱穴の平面は、ほぼ円形を呈し、径26~36cm、深さ5.3~18cmを測る。柱間距離は1.90~2.34mである。出土遺物は皆無であった。

土塀

S K 2 (Fig11)

C区西部寄りに位置する。平面は隅丸方形を呈し、長辺1.80m、短辺1.16m、深さ9.8~15.8cm、長軸方向N-20°-Wを測る。断面は浅い逆台形をなし、埋土は褐色粘質土の単純一層である。北側の一部は、S B 1 (P 6)によって切られていた。遺物は弥生土器の縄片が出土したが、図示できるものはなかった。

柱穴

P 69 (Fig 7)

C区南部に位置する。平面は円形を呈し、長径42cm、短径36cm、深さ20.8cmを測る。埋土は褐色粘質土の単純一層である。遺物は、須恵器1点が出土した。

出土遺物 (Fig15-48)

48は須恵器杯蓋で、若干丸味を帯びた頂部から緩やかに口縁部へ至る。口縁部内面にかえりがあり、内外面共にナデ調整を施す。

包含層出土遺物 (Fig15-57)

57は平瓦で、凹面は細い布目が施され、凸面には縄目の叩き目がみられる。

5 D・E区

調査区の概要

D区において検出された遺構は、掘立柱建物跡2棟、溝1条及び柱穴とみられる数個のピットである。同区の基本層序は、I層：耕作土、II層：褐色粘質土、III層：黄色シルト（地山）で、遺構検出面は地山（III層）上面である。出土遺物は、主にII層に含まれていた。

E区において検出された遺構は、5個のピットである。同区の基本層序は、I層：耕作土、II層：褐色粘質土、III層：黄色粘質土、IV層：黒色粘質土で、遺構はIII層上面において検出された。なおIV層は厚い堆積を呈するが、西から東へと徐々に薄くなり、同区東端では消滅していた。出土遺物は、その殆どがIV層に含まれていた。

掘立柱建物跡

S B 2 (Fig12)

D区西端に位置する。建物は、桁行4間(7m)×梁間3間(4.5m)の南北棟で、棟方向はN

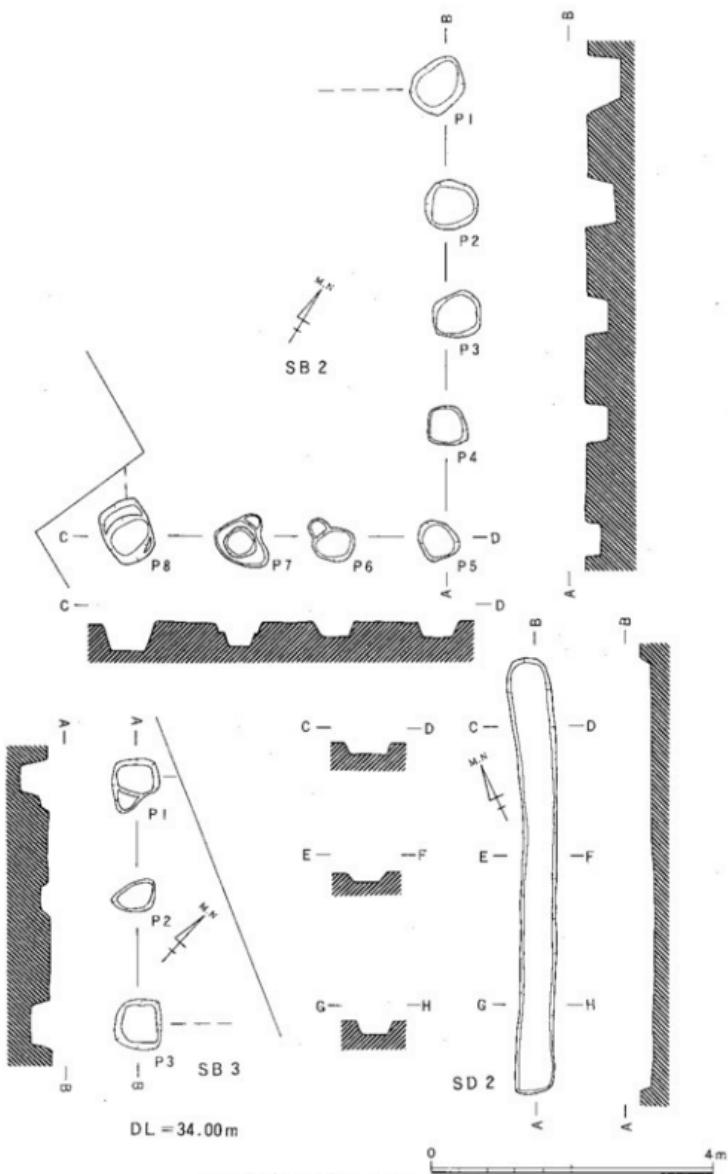


Fig 12 D区 SB 2・SB 3・SD 2

-30.5°-Wである。柱穴の平面は、隅丸方形を呈し、長辺82cm、短辺50cm、深さ21.6~49.4cmを測る。柱間距離は、1.5m等間隔となっている。西側は調査区外であるため未調査である。埋土は褐色粘質土である。出土遺物は少量で、図示できるものはなかった。

S B 3 (Fig12)

D区西端、S B 3の北東側に位置する。建物は、2間(3.40m)×数間の南北棟と考えられるもので、桁・梁とも調査区外へ延びているとみられる。棟方向は、N-40.5°-Wと考えられる。柱間距離は、1.7m等間隔となっている。柱穴の平面は、隅丸方形を呈し、長辺70cm、短辺46cm、深さ10~39.8cmを測る。埋土は褐色粘質土である。出土遺物は少量で、図示できるものはなかった。

溝

S D 2 (Fig12)

D区中央部に位置する。溝は、ほぼ南北に延び、幅50~60cm、深さ1.4~17.5cmを測る。主軸方向はN-24°-Eである。断面形は逆台形を呈し、壁は急角度で上がる箇所と緩やかに上がっている箇所がある。埋土は灰褐色粘質土の単純一層である。出土遺物は少量で、図示できるものはなかった。

包含層出土遺物 (Fig15-16-D区: 50~52・58、E区: 53~56・61~70)

50は土師器碗で、輪高台を有する底部から緩やかに立ち上がり外反する。口唇部は丸くおさまる。内外面共にナデ調整を施す。51は土師器鍋で、胴部から口縁部にかけて直線的に立ち上がる。口唇部は丸くおさまる。口縁下には紐状の鋲が付く。52は須恵器壺で、やや脹らみをもって立ち上がり肩部で強く屈曲する。肩部外面に2条の沈線がみられる。58は黒色頁岩の石斧未製品である。全長13.4cm・全幅6.1cm・全厚1.3cm・重量150gを測る。53~56は弥生土器壺である。53が薄手の底部に対し、54~55は比較的厚みのある底部を有す。いずれも直線的に立ち上がる。53の外面には、丁寧なヘラ磨きを施す。56は胴部から内湾気味に立ち上がり、口縁部は丸味をもって外反する。貼付口縁を有し、頸部下に貼付突帯を施す。胴部外面にはタテ方向のハケ、内面には指頭圧痕がみられる。61~63は弥生土器壺である。いずれも口縁部は「く」の字状に外反する。61・63の口縁端部が外傾する凹面を有するのに対し、62はやや肥厚し、外傾気味に丸くおさまる。61は頸部外面にナデ調整、頸部内面から上胴部内面にかけて右上がり及び下から上へのヘラ削りを施す。また中胴部内面には、タテ方向のナデがみられる。62は内外面共にハケ目、指頭圧痕を施す。胴部内面には、タテ方向のヘラ削りを施す。63は頸部外面にヨコ方向のハケ、胴部外面にタテ方向のハケ調整を施す。64は土師器盤で、平坦な底部からやや外反気味に立ち上がる。内外面共に丁寧なヘラ磨きを施す。65は土師器釜で、胴部は上外方へ脹らみ気味に上がり、口縁部でやや内傾する。外面には欠損した鋲が付き、その下に黒斑がみられる。66は須恵器杯蓋で、平坦な頂部に欠損したつまみをもつ。外面には回転ヘラ切りを施す。67~69は須恵器杯身で、いずれも輪高台を有し、高台脇には強いナデがみられる。67の底部外面には、ヘラ削りを施す。70は丸瓦で、凹面は綿い布目が施され、凸面は摩滅が著しく調査不明である。

IV ま と め

稻荷前遺跡は平成元年度に行われた遺跡分布調査で新たに発見された遺跡であり、表掲では須恵器片等が採集されており、古代を中心とする遺跡と考えられていた。今回の緊急調査は、ほ場整備事業に伴うものであり、調査面積も少なく、遺跡の全容については不明な点も多いが、弥生時代中期から中世までの複合遺跡としてとらえられ、新しい資料を多く検出している。以下各時期について簡単にまとめる。

弥生時代では、中期後半から後期前半にかけての資料が検出された。B区の竪穴住居跡は南半部を削平されており残りは良好ないが、出土遺物からみると中期後半の住居跡と考えられる。また、E区の包含層も同時期とみられる。さらに、C区のピット群は出土遺物が乏しいため確実な時期決定はできないが、埋土等からみれば弥生時代と考えられるものがあり、中位面上に中期の集落の存在が確認された。稻荷前遺跡の南西方向には原遺跡が位置しており、従来、龍河洞洞穴遺跡しか知られていないかった中期の遺跡の様相が明らかとなりつつある。また、試掘調査では後期前半の遺物も良好な状態で検出されており、後期の段階においても集落は存続していたものとみられる。

古代では、B区 S D 1とD区 S B 2・3、S D 2が検出されている。いずれの遺構もやはり出土遺物が少なく時期決定は難しいが、S D 1は奈良時代、S B 2・3、S D 2は平安時代とみられ、S B 2・3の柱穴の規模からみて奈良～平安時代にかけての重要な施設の存在が考えられる。なお、S D 1とS B 2はほぼ平行する位置関係にある。

中世の遺構としては、C区の柱穴群が検出されており、S B 1とS A 1が該当する。S B 1とS A 1は重複しており時期差があるが、柱穴群は15m四方に集中しており周辺部では検出されておらず、短期間、小規模な建物群であったとみられる。

A区では、石室状遺構1基が検出された。石室を呈するが、検出・構築状況から古墳の石室とはいい難く、しかも帶状の集石を伴うことをみれば古墳以外の性格を有するものと考えざるをえない。遺物は、石室中央及び周辺部から須恵器等が出土しているが、混在した可能性が強く、遺物の出土状態と遺構の形態等を考え合わせても遺構の時期は決定できない。遺構の性格としては、先述したように遺物が少なく明確にはいえないが、一種の宗教信仰的施設、例えば経塚、修驗道関係等のものである可能性が考えられる。現在のところ県内には、このような石室状遺構は発見されてはいないが、今後類例をみて検討すべきである。

以上のように、竪穴住居、掘立柱建物、石室状遺構等の遺構をはじめ、弥生時代中期後半から後期前半にかけての出土遺物を得たことは今回の調査の成果であり、今後の貴重な研究資料である。

(森田・吉原)

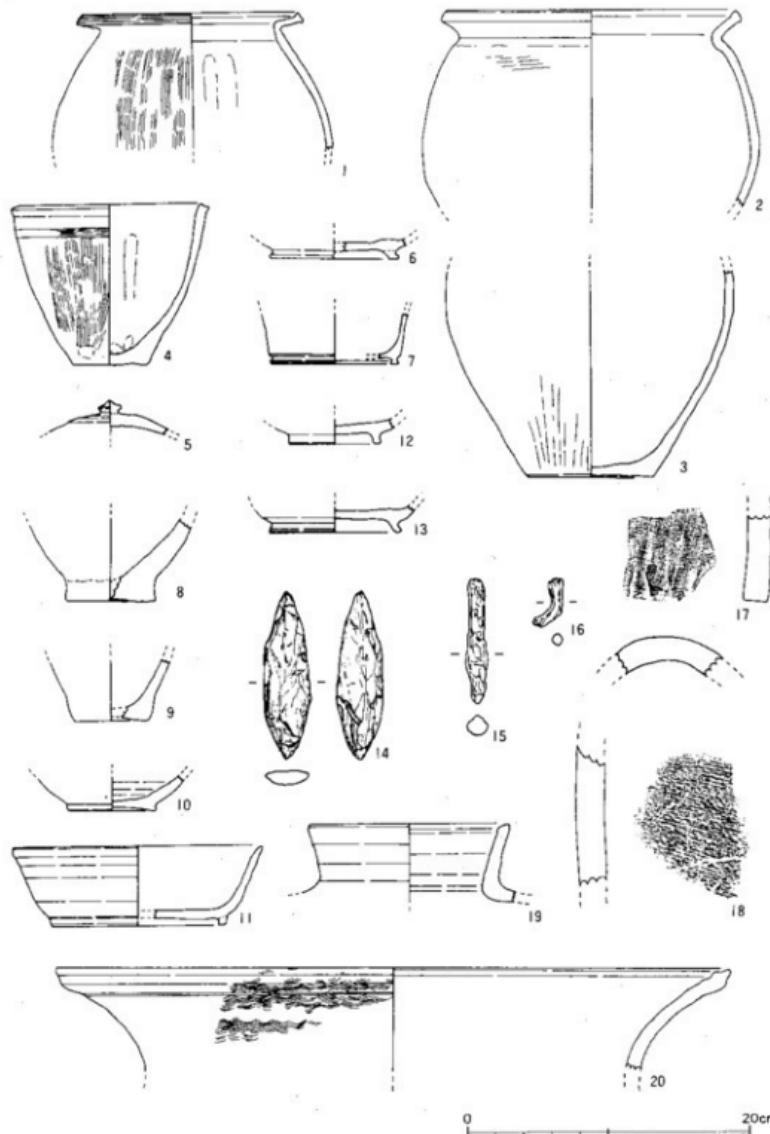


Fig. 13 G 2・16・石室状造構表採遺物実測図
(G2: 1~4・15, G15: 5・16、石室状造構: 8~14、)
(18~20、表採: 6・7・17)

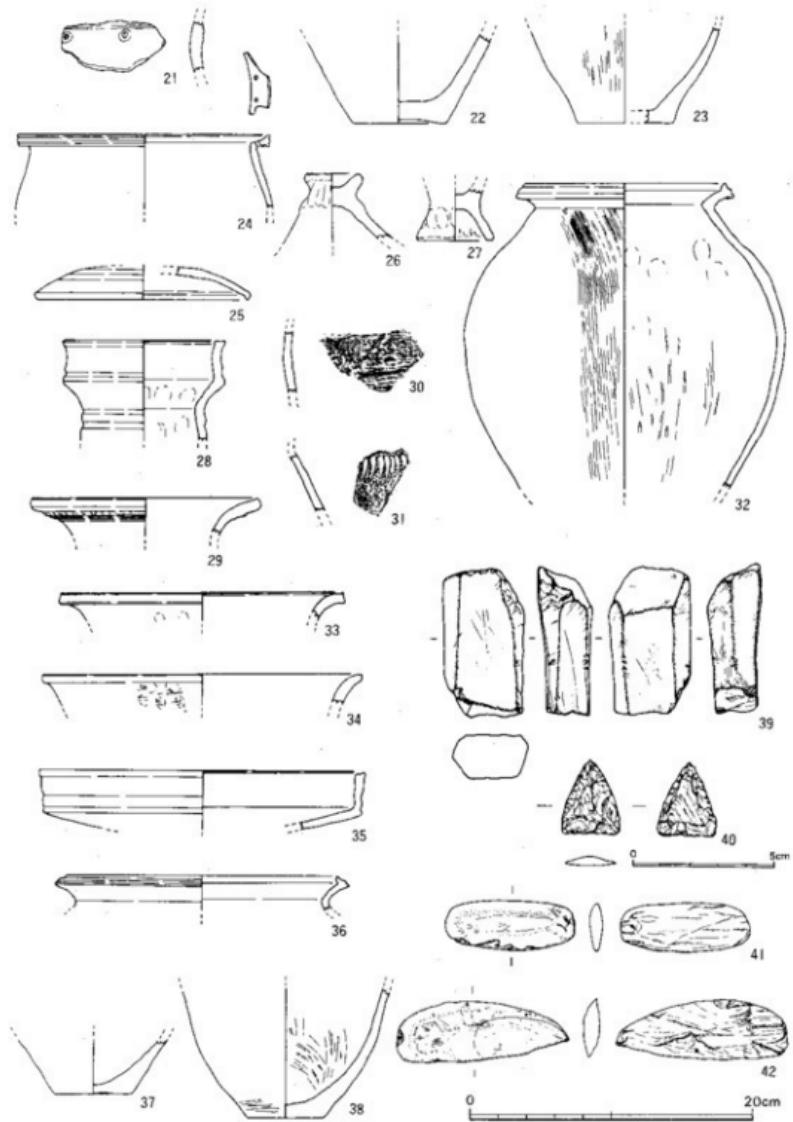


Fig. 14 A区包含層・STI 出土遺物実測図
(田層: 21~25・39、STI : 26~38・40~42)

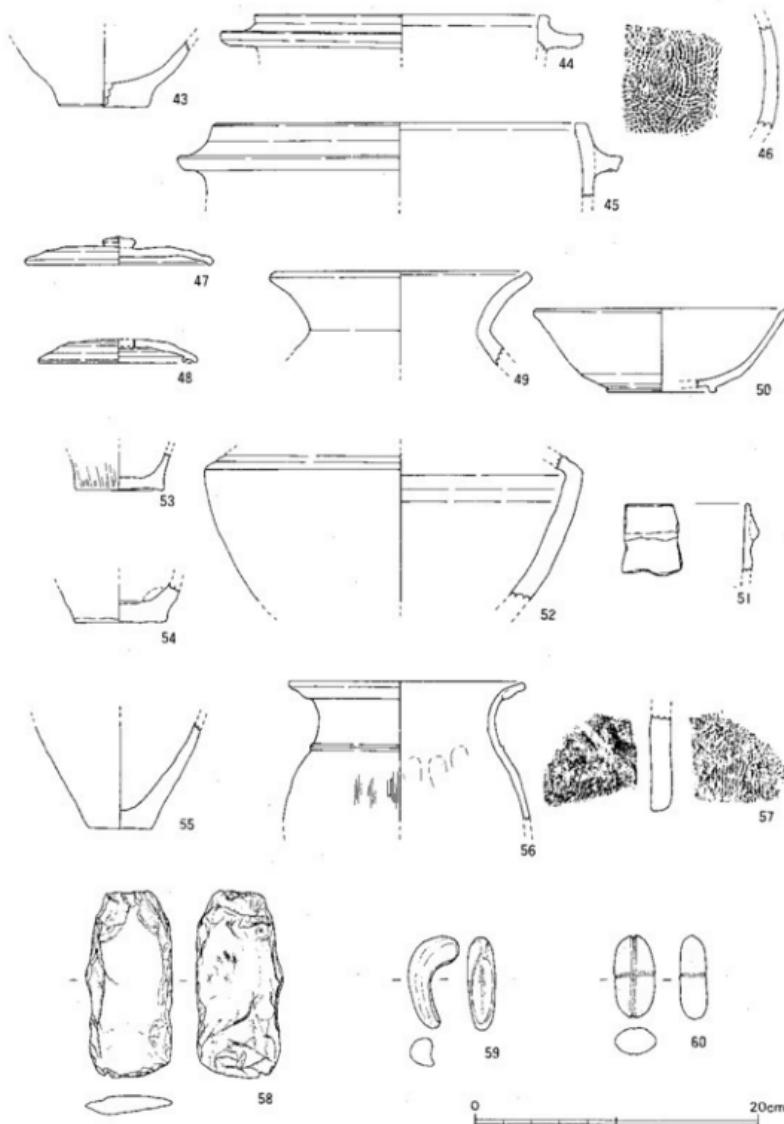


Fig. 15 A～E 区包含層・C区P69出土遺物実測図
 (A区Ⅲ層：60、B区Ⅱ層：43～47・49～59、C区P69：48)
 (II層：57、D区Ⅱ層：50～52・58、E区Ⅳ層：53～56)

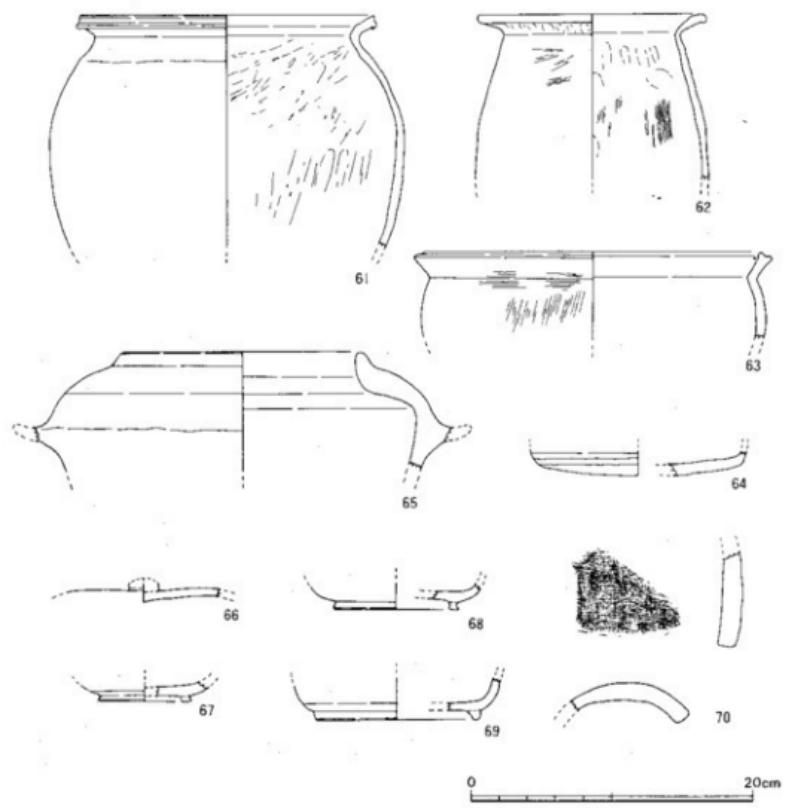


Fig. 16 E区包含層出土遺物実測図

写 真 図 版



遺跡航空写真



遺跡遠景（東より）



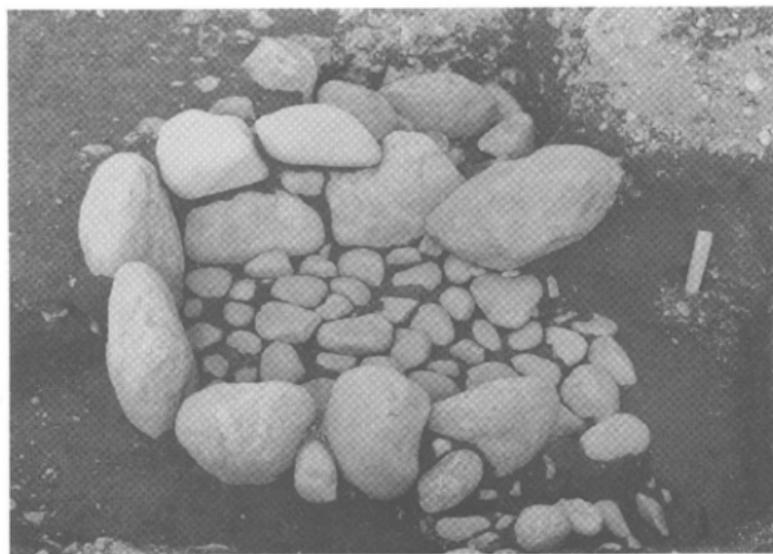
遺跡近景（南より）



遺跡近景（南より）



A区石室状遺構全景（南より）



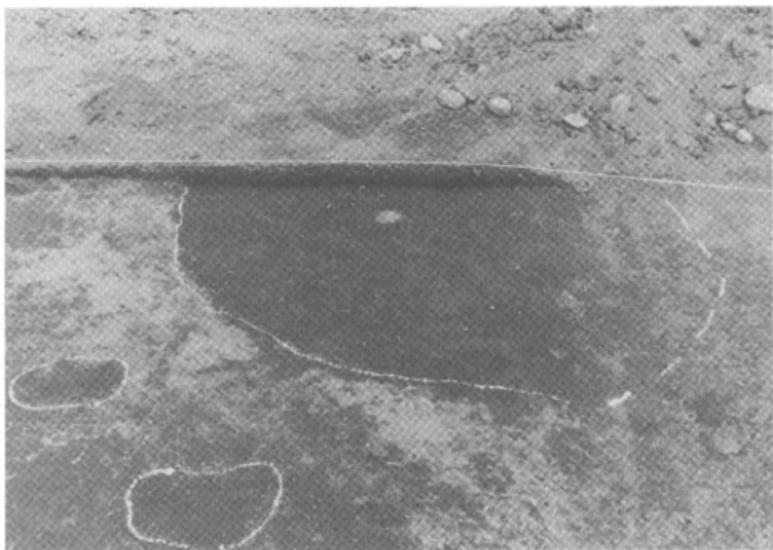
A区石室状遺構（南より）



A区遺物出土状態



A区遺物出土状態（石錐）



B区 ST1 検出状態



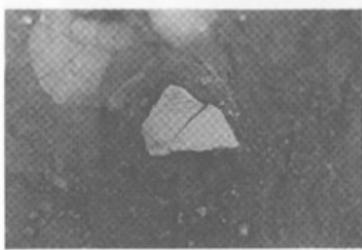
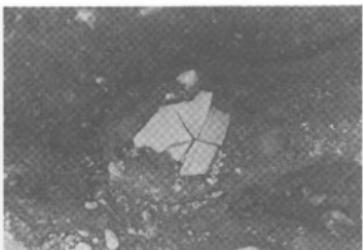
B区 ST1 完整状態



B区 ST1 中央ピット遺物出土状態



B区 ST1 中央ピット出土遺物



B区 ST1 遗物出土状態



C区遺構完掘状態（南より）



D区遺構完掘状態（南西より）



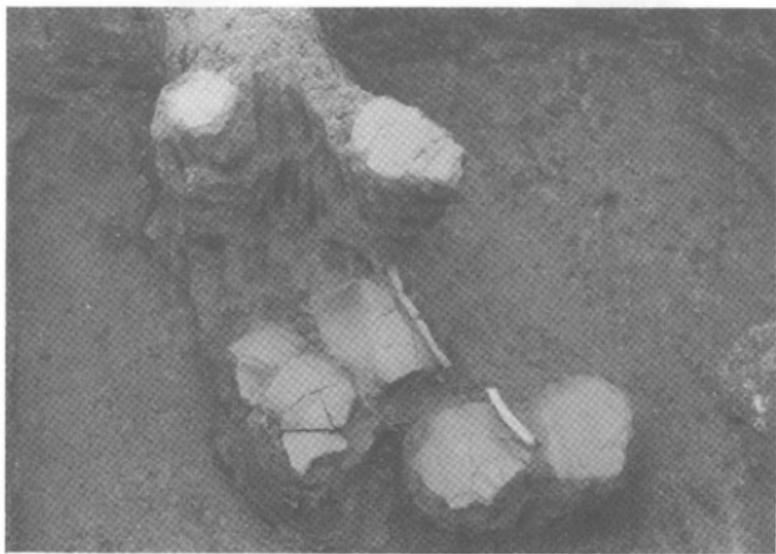
E 区遗物出土状态



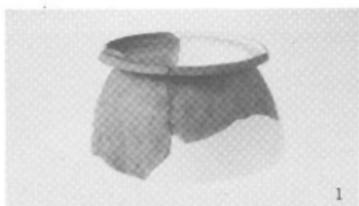
E 区遗物出土状态



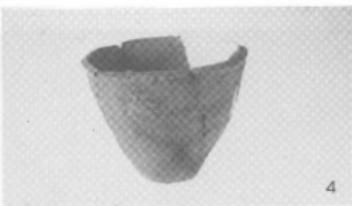
E 区遗物出土状态



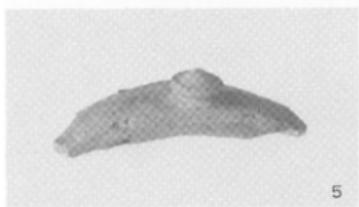
E 区遗物出土状态



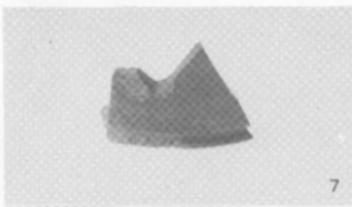
1



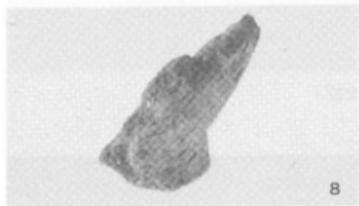
4



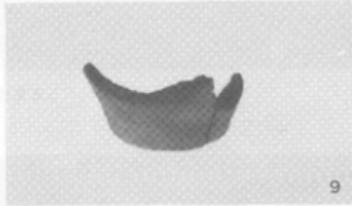
5



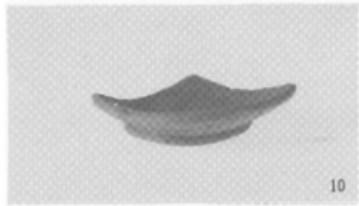
7



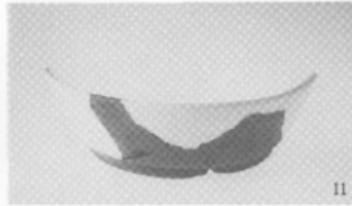
8



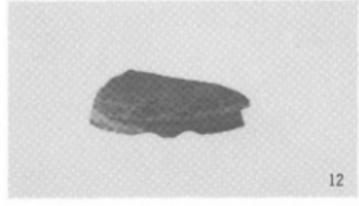
9



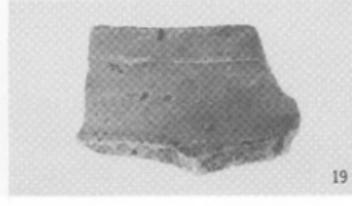
10



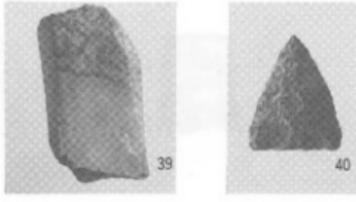
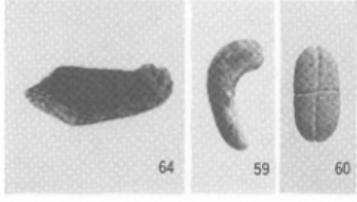
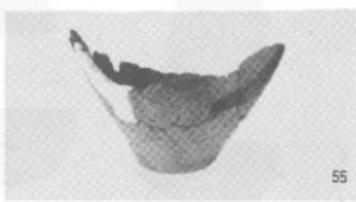
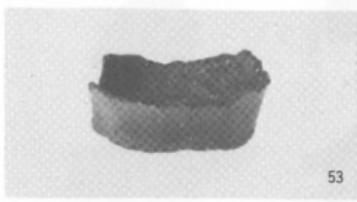
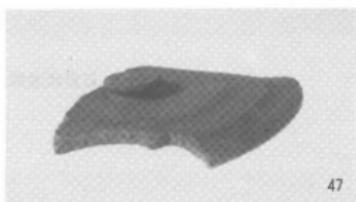
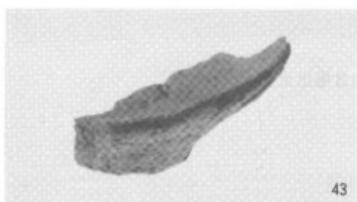
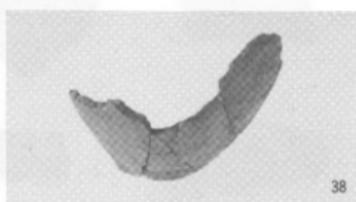
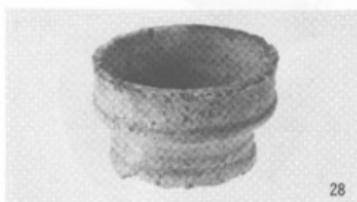
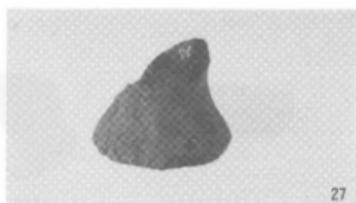
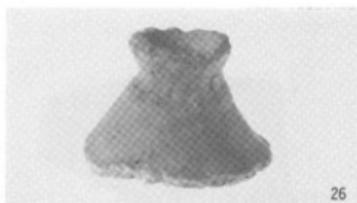
11



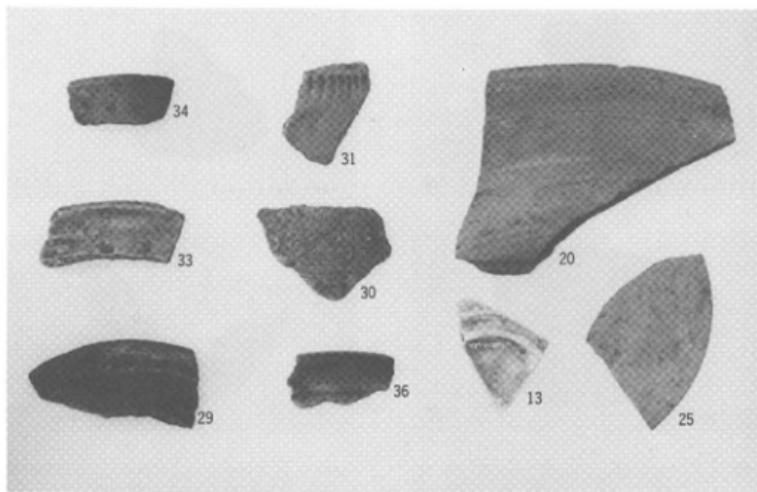
12



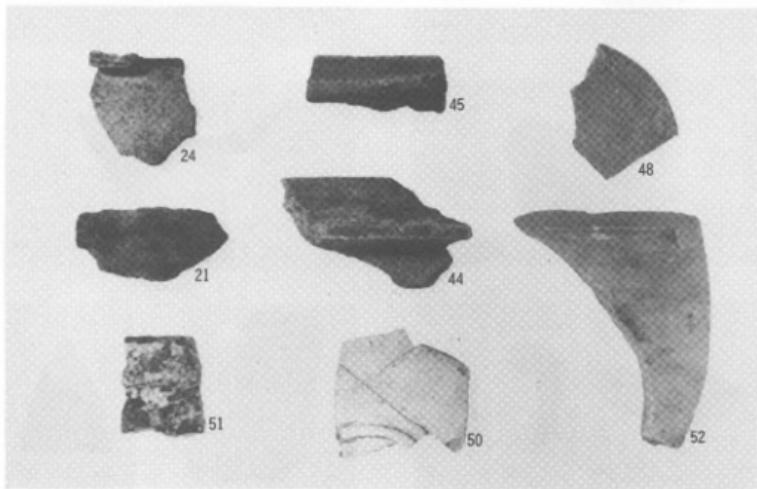
13



ST I、A·B·E区包含层出土遗物



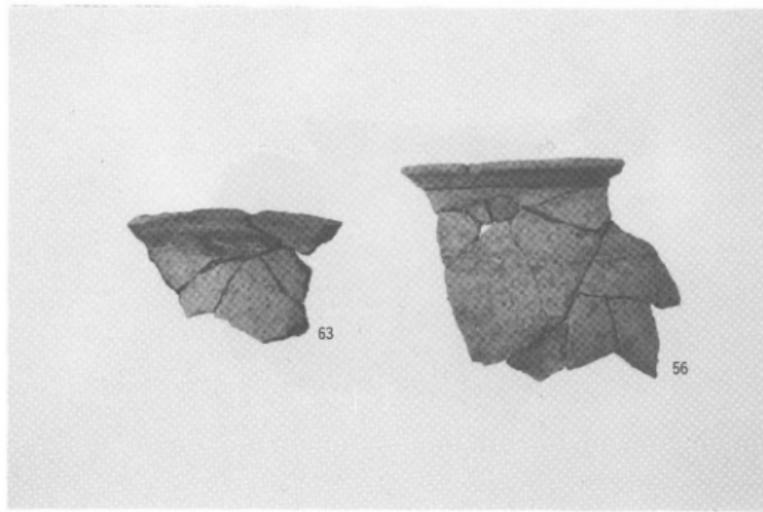
ST I、石室状造構、A区包含層出土遺物



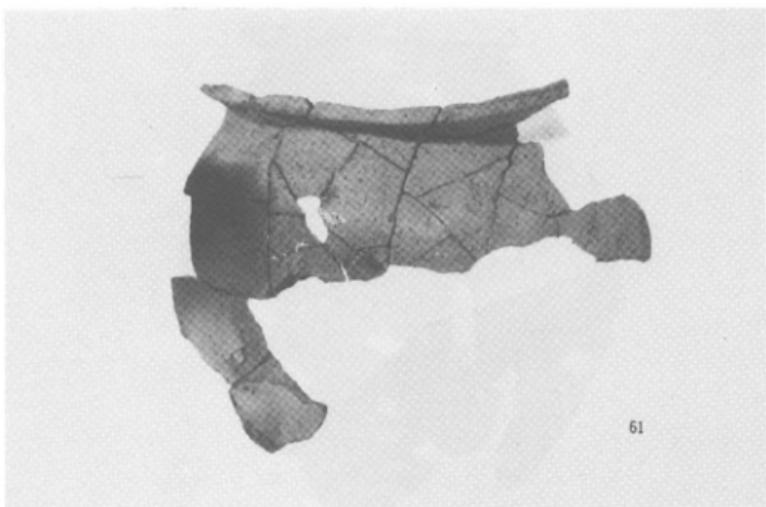
P 69、A・B・D区包含層出土遺物



S T I 出土遺物

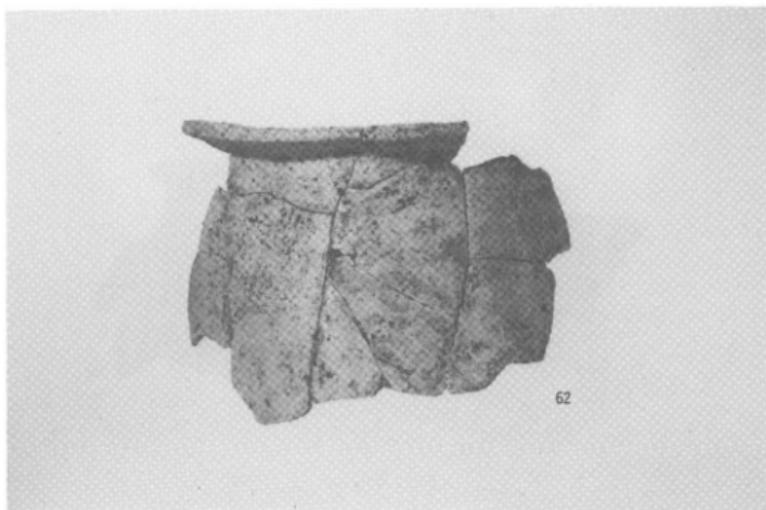


E 区包含層出土遺物



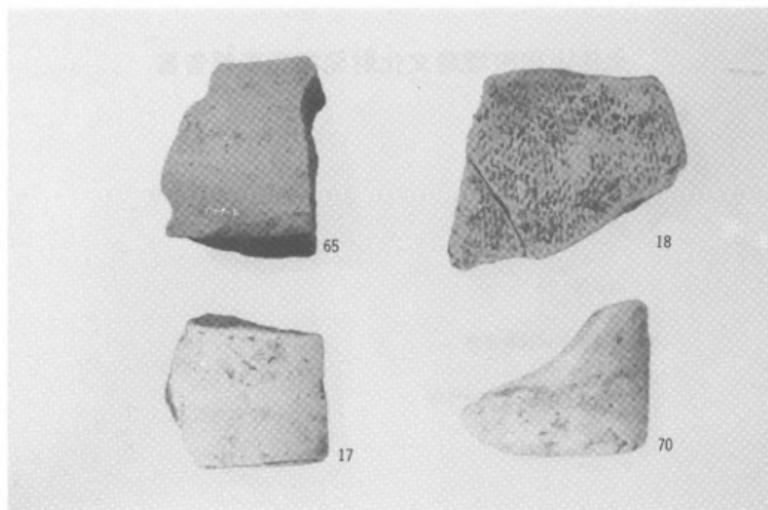
61

E区 包含層出土遺物

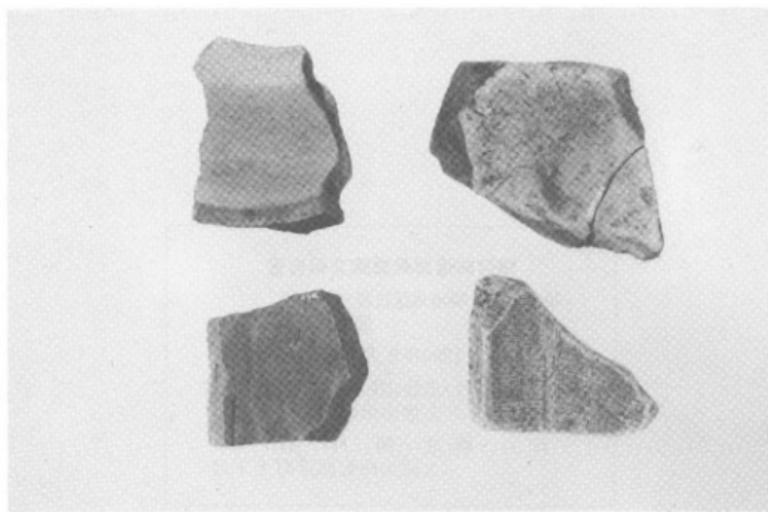


62

E区 包含層出土遺物



石室状遺構、E区包含層出土及び表採遺物(表面)



石室状遺構、E区包含層出土及び表採遺物(裏面)

土佐山田町埋蔵文化財発掘調査報告書

1. ひびのき遺跡
2. 東谷窯跡
3. 林田遺跡
4. 山田塙
5. 鏡野中学校校庭遺跡
6. 楠目遺跡発掘調査報告書

稻荷前遺跡発掘調査報告書

—第41-4号 明治地区ほ場整備工事
関連遺跡発掘調査—

1990年1月31日

編集・発行 土佐山田町教育委員会
土佐山田町宝町1-2-1

印 刷 北 岡 印 刷 所
土佐山田町西本町1丁目